<table>
<thead>
<tr>
<th>Title</th>
<th>ホルスト・ヴィルナー著『定期傭船契約』 □契約と契約当事者の法的地位とのボールタイム・チャターに基く論述</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Author(s)</td>
<td>福岡 博之</td>
</tr>
<tr>
<td>Citation</td>
<td>一橋論叢 □ 38(3): 283-293</td>
</tr>
<tr>
<td>Issue Date</td>
<td>1957-09-01</td>
</tr>
<tr>
<td>Type</td>
<td>Departmental Bulletin Paper</td>
</tr>
<tr>
<td>Text Version</td>
<td>publisher</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.15057/3900">http://doi.org/10.15057/3900</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
のために革命の成果が過少評価されているのではないか、とい
うことであり、革命そのものを否定するような論者には
あって、そのものが革命の成果を守るためのもので
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
あって、革命そのものを否定するような論者には
ある程度の成果が求められていることから、革命の
成果を守るために、社会全体にわたっての協力が
求められている状況が、この文脈においては、核
心となるテーマとなる。しかし、革命後の社会は、
経済面での急速な変革や、社会的変化が著しく
ある。このことから、革命後は、社会全体に
わたっての協力が求められている。
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運動送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運動送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運動送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運動送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運動送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運動送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運動送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運動送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運動送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運動送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運動送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運動送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運動送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運動送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運動送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運動送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運動送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運動送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運動送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運動送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運動送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
再運動送契約の履行について、その責任が船長の任務に属し船長の
定義条項として、船長の権限は、船長が船の安全や旅客の安全を確保するために必要かつ適切な範囲内で行使することを意味する。この権限は、船舶の所有者に対する責任を含む。

一方、船員は、これらの条項に対する従順を欠くと、その懲罰は、船長の裁量によって決定される。したがって、船舶の所有者は、これらの条項を遵守し、船員に対し、適正な訓練を提供することが求められる。

ここで重要であるのは、船舶の所有者に対する責任を、引渡しの際の責任を含むものとすることができる。すなわち、船舶の所有者は、引渡し時に、必要な安全措置を講じ、船員に対し、適正な訓練を提供することを必要とする。
これは補償約款解釈の一般に承認された原則に反する、今日もなお、補償約款解釈の問題を提起するための、特定の文書形式を用いることにより、補償約款の理解を困難にすること、また、補償約款の解釈を困難にするためである。こうした補償約款の解釈の問題は、約款の内容を理解するための、明確な文書形式を用いることが不可欠である。

特別補償約款解釈の問題を提起するための、特定の文書形式を用いることにより、補償約款の理解を困難にすること、また、補償約款の解釈を困難にするためである。こうした補償約款の解釈の問題は、約款の内容を理解するための、明確な文書形式を用いることが不可欠である。
負いかた（商事上の給付）を生じる被保険者の船舶の損害につ
いて、原則として保険契約の範囲に一概に当たらず、保険契約
が規定する範囲に限られる。なお、船舶所有者は負担しないもの
を含むものである。保険契約の範囲が規定されていない場合
は、保険契約の規定において外れることも考えられる。保険
契約の範囲が規定されていない場合については、保険契約の
規定の範囲を超えた損害については、保険契約の範囲に一概
に当たらないものである。
問題

第三十八巻 第三号

第二編 論義

第二章 貸借関係

第三章 貸借に於ける責任

第十九条

一 貸借の範囲

本文

...
の問題（1968年の）につき、被保険者・被保険者の共同債務者におけるの
法律関係において大きな不明確性が支配しているという勾
帰する（1968年）に

思うに、定期付保契約の法則的規制の見解により、その
の法律関係において大きな不明確性が支配しているという
契約当事者の利益関係と、更に常態なる第三者的利益を公
正な法律の立場から評価し、且つ法典の体系に及ぼす調和の
ように構成することとは、著者の論する通じ問題解明のためには
必要不可欠である。この意味においては、定期付保契約に完全な
範囲で責任を課すことは、これと反対に被保険所有権者に全面
的な責任を課すこととは同様に、公正を欠くことのよう思い
される。そして、著者が契約関係の定範を、契約契約相互間の内
的関連性の細密な考究と契約目的なないし、実際の慣行と要求
に対する顧慮を通じて把握した法律的に評価し且つ、これに
基して法的効果を確定しようとする方法自体に、敬意を覚
える。ただ、しかし、その帰結において出るかかる海保
契約論則説
が、すでにわが国の学者により受けて来た経過を抜
そのままに、それ調査において出るかかる海保
契約論則説
を再び触れていったためには、実際の

具体的場合の諸事項について、海保事項と事務事項との明瞭な
区別を示すべき更に具体的な考究が求められ、それ故に
であってもが必要である。ともあれ、著者が前法規的デック
イゼを極めて重視し、この観点に立脚して、被保険者が一元範
囲において無理のない役割を演ずる企業者としてその法的
位を、その範囲で再び法的取引の前提に押し出したことは
極めて注目に値することである。結局、本書を読むに
について種々有益な助言を授けて下さった皆様に対して大
敬申し上げます。

（横山大学大学院学生）